

『こころ2.0を創発する』 ～<世界身体／書き込みのシステム>の思想と実践～ “Emergence of kokoro 2.0” for ISSJ 2017

川村丈志
Takeshi Kawamura

明治大学大学院 情報コミュニケーション研究科 博士後期課程
Doctoral Course, Graduate School of Information and communication, Meiji University.

要旨

基礎情報学^[1]に於けるHACS／心的システムは、心理学・精神医学・AI開発領野に適応することで、哲学に於いては永遠に破棄されたかにもえても今なお我々／社会とア prioriに住まい続ける<思考機械／客観世界：二元論>モデルを蕩揺し、さらに<身体行為／環世界：意識の自然^[2]>モデルへと、その礎の学際的・実践的転回が可能であろう。と同時に各学域から共有可能な理論的・事例的接続の磁場も不可欠である。

本研究者は大黒岳彦の「世界身体」^[3]、及びフリードリヒ・キッターの「書き込みのシステム」^[4]を、前者は<身体行為／環世界：基盤>、後者は<観察者／記述者：機序>、各概念の触媒としてそこに措定する。

さらに意識の萌芽と変遷を学際的に遡り、別の仕方で、再プロットングすることで、弁証法的に作業仮説が検証され鍵概念が解像度を高めてレンダリングされる。これらを「新实在論」の磁場^[5]で覚醒させることで、諸概念は自ずと共鳴し、訴求力ある<こころ2.0>パラダイムは創発されるであろう。本発表はその概要の素描である。

1. 歴史^{2.0}：はじめに、（これから、そこにあるのは）<響命>

すべてはひとつの響きである。我々は所与の環世界に所与の身体と共に生まれ落ち、その地平に佇み微睡みながら渾然一体となって探索を始める。そこにあるのは、主体／客体でも、意識／無意識でも、思考機械／客観世界でもなく、茫洋とした命の響きあい、いわば情動調律^[6]である。

「言語が支える文明の復興により、右脳に囁きかける神々が沈黙し、社会意識が芽生えた。」というジュリアン・ジェインズ思想を支えるのは<身体行為／環世界>における、詩と音楽の響きである^[7]。『神々の沈黙』する現代において右脳に囁きかける神々の声は、代替的に芸術・文藝・メディア作品となるが、それはまた有史前から、エクリチュール／パンチュールとしても^[8]連綿と描き続けられている。

たとえば、フランス古典主義の画家、ニコラ・プッサンの『抒事詩人の靈感』が（スティグレルに從えば^[9]）ヒュポムネーシスとなり、ウエルギリウスの『アエネーイス』とともに、ホメロスの『イーリアス』が、その片隅に描かれていることを我々は想起：アナムネーシスする。ゼウスの息子、芸術の神であり治療神でもあるアポロンが、文藝の女神カリオペと月桂樹の冠を手にするプットーに包まれながら、まさに文字を綴ろうとする詩人に靈感を与えるこの作品は、ジェインズの<二分心>説を^[10]、あるいは<世界身体／書き込みのシステム>を、鮮やかに描いているといえるであろう。

しかし我々にとってヒュポムネーシス／アナムネーシスは（アリストテレスの）作用因／結果を意図しない。そのように媒介的に感じられるとしても、それはことのはじめから、ひとつの響きとしてそこにあるのだ^[11]。さらに、それは（基礎情報学に從えば）生命情報／社会情報／機械情報の通時的／共時的な（アリストテレスのデュナミス／エンテレケイアとしての）グラデュエーションでもあろう。

もちろん、それは（ドレイファス／テイラーに從えば^[12]）媒介説ではなく接触説からアプローチされ、（メイヤス^[13]）であるよりはフェラーリス／ガブリエルによる^[14]新实在論を磁場とする、本研究の鍵概念<世界身体／書き込みのシステム>である。これら作業仮説から導出される概念スキーマを、あらかじめ、今ここで提示するとすれば、『<こころ2.0>パラダイムとは、<世界身体：身体行為／環世界><書き込みのシステム：観察者／記述者>の<響命>プロセスである。』となるであろう。

2. 起点^{2.0} : <HACS/心的システム> 未踏の閉域にむけて 聖性から

基礎情報学は、オートポイエティック理論とルーマンの理論社会学の閉域に、システムの階層概念と情報のグラデュエーション概念^[15]を導入することで、現代的な心的システムの構築遂行を可能とする極めて希有で美しく、また実践的に均衡のとれた理論である。同時に、そのコアにはフランシスコ・ヴァレラからもアクティベートされた東洋的/身体的な思想が息づいており^[16]、さらに「聖性」概念も導入されている^[17]。本研究者も情報社会に欠かせないポスト倫理を構想していたため深い共感を覚えるが、それこそが伝搬メディアの発達をもたらした規則化/秩序化により奪われた太古の狩猟採取の組織に備わっていた活性度や柔軟性を、いま再び、人類の普遍的なイメージの源泉とともに、ICTにより賦活化しようとするタイプⅢコンピュータとして^[18]、今後社会実装するために不可欠な ethics なのである。

それはフロイドと袂を分かった C.G.ユングの『元型論』でもあり^[19]、あるいは科学哲学者でもあり詩的創造力の研究者でもあるバシュラールの『空間の詩学』^[20]、プルーストに仮託しながら『機械状無意識—スキゾ分析』^[21]を遂行したフェリックス・ガタリの遺作『カオスマーズ』^[22]の思想とも通底しながら、さらに「逆にく倫理」こそが情報社会の「可能性の条件」なのである。」と喝破した^[23]大黒岳彦の ethics /aesthetics とも響き合うのである。なぜなら、1989年、すでにガタリは「人間科学や社会科学を科学主義的なパラダイムから美的-倫理のパラダイムへと移行させよう」と宣言しているのだから^[24]。

もちろんここには頑なに架橋を拒むかに見える未踏の閉域があるが「意識の自然」と「新実在論」をここに措定し共鳴を試みる。本論では7.倫理、にてさらに展開する。このように本研究では<HACS/心的システム>概念と共に、これからの情報社会の、こころの起点を聖性として起動し、2.0へと更新する。

3. 基盤^{2.0} : <世界身体 : 身体行為/環世界> エコゾフィーとの共鳴とともに

<世界身体>は、哲学者・メディア論研究家の大黒岳彦の鍵概念である。「コミュニケーションという出来事が意識以前の的であるとするニコラス・ルーマンの所説を超えて、さらに言語以前の、意味以前のレベルにおいて、コミュニケーションはつねにすでに生起してしまっている。」^[25]とする彼の起点は、本研究での<響命>概念とも、ダニエル・スターンの「情動調律」とも通底するものである。

当然のことながら、それは、アントナン・アルトーの、そしてまたドゥルーズ/ガタリの、「器官なき身体」でもあり、メルロ＝ポンティの<世界の肉>でもある。「それはある瞬間に世界としての<身体>をひとつの情動に染め上げたかと思えば、次の瞬間には別の情動に同じ<世界身体>を塗り替える底の、メタモルフォーゼする「主体なき“コミュニケーション”」である。この事態を、ボードレー＝ベンヤミンの言葉を借りて“万物呼応”と称することもできよう。」^[26]とあるように、<世界身体>は、大黒がしばし、その影響に触れる、大友克洋の「AKIRA」を彷彿とさせるように、大陸的かつ東洋的概念でもある。

したがって、まず第一にこの概念は、本研究に於いて<書き込みのシステム: 観察者/記述者>とつなぐために、通約可能性を高めた大黒岳彦の<世界身体>のパラフレーズである。

次に、それは、上述したように（「生の哲学」との接合は慎重に回避しながらも）フランス哲学と親和性の高い概念で有ることから、さらに戦略的に、大陸哲学/ドイツ観念論/分析哲学とで架橋されえなかつたいくつかのミッシング・リンクを、本論 2.起点、で触れたように、新唯物論の磁場で、<世界身体 : 身体行為/環世界 : 意識の自然>概念を触媒として円環的につなぐ試みとしても見立てている。

最期に、ICT 領野、例えば、公開分散元帳としてのブロックチェーンに記録されていく P2P を前提としたビットコイン、脱中央集権型の SNS マストドン、さらには AI/シンギュラリティを迎えるにあたり、<世界身体 : 身体行為/環世界>概念はその開発領野に遡及的にその礎を築く足場ともなり得るだろう。

身体行為に関しては、現象学的心理学、生態心理学、看護学、福祉学、映像生態学等とともに、AR/VR 領野の開発の視座となろう。同時に環世界からの接合に関しては、現象学諸学派とともに、「自然環境」「社会環境」「精神環境」にくわえて「情報環境」の問題提起も 1980 年代末に社会活動「ジェネラシオン・エコロジー」として実践していたフェリックス・ガタリの<エコゾフィー>概念、それを継ぐエド

ワール・グリッサン、ジャック・ランシェールから「環境文学」の系譜までを含有し、身体論・ICT・有機機械・環境生態・文藝活動・社会活動とをつなぐ学際的概念としても活性化したいと考えている。

このように本研究では、<世界身体：身体行為／環世界>概念の循環的措定により、エコゾフィー系諸諸学派との共鳴も計りながら、これからの情報社会の、こころの基盤を、2.0へと再生する。

4. 機序^{2.0}：<書き込みのシステム：観察者／記述者> 複合社会／創発的進化へ

フリードリヒ・キッター（Friedrich A. Kittler, 1943年6月12日 - 2011年10月18日）はドイツの文芸・メディア評論家とされるが、その「精緻なシステム（ディスクール）分析と、ベンヤミンの文学的イメージにむせかえるような文体とのほとんど奇跡的な結合。そしてこの結合がこの書物にもたらすまか不思議な光彩。」と、その主著のひとつ、1986年に刊行された『グラモフォン・フィルム・タイプライター』の邦訳の後書きでも評されるように^[27]、トマス・ピンチョンからピンク・フロイドまでをも愛する彼は学際的な美学研究者であると同時に、エクリチュールをメディアとしたアーティストでもあろう。

『書き込みのシステム 1800/1900』の原著は^[28]、その前年、1985年に刊行されているが、邦訳は未刊行である。しかもその英語版では「書き込みのシステム」が「ディスクールのネットワーク」“Discourse Networks, 1800/1900”とプラグマティックに（あるいは言語論的に／システム論的に）意識されていることには驚きの声もあるが^[29]（同時に Discourse が、大陸的ディスクールか分析的ディスコースか、という問題系もあるが）、リルケの『始原のノイズ』同様、それは翻訳不可能性がもたらす（差異の差異がもたらす）概念の創発でもあり（科学哲学の文脈に於ける）通約不可能性に帰結するものではないとも考えられよう（無論、通常の翻訳は、むしろそれをできる限り回避することを目差した行為ではあるが）。

ここでカジュアルな事例をあげよう。我々の多くは『星の王子様』として、サン＝テグジュペリのその代表作と接触している^[30]。その原題はもちろん、“Le Petit Prince”であり、英訳も“The Little Prince”であるところを、初代翻訳者、内藤濯が『星の王子様』と意識したことで、我々はそのタイトルのもとで、その世界観を感受し、愛読している。（原版の翻訳権も含む）著作権の切れた2005年以後も、その遺族は、タイトルの意識の創作性を主張し、あらたな翻訳者との間で葛藤があるようであるが^[31]、『小さな王子さま』や『ちび王子』のタイトルが（個人的には支持するが）それを超えるのには時間がかかりそうである。

この事例から我々が看取できるのは、そこにあるのは多様な歴史・文化・社会の文脈のなかでの、それぞれの「書き込みのシステム」が、それぞれの「真実」を創り上げているネットワークだということである。換言すれば、我々が感受するのは、揺るぎのない一つの「客観世界」の中で「思考機械」が演算処理するひとつの「事実」ではなく、多様な歴史・文化・社会の文脈のなかでの、それぞれの「書き込みのシステム」が、それぞれの「真実」を創り上げている「ディスクールのネットワーク」の動態なのである。重ねて言おう、それは「客観世界」ではなく「ディスクールのネットワーク」の「動態」なのだ。

ここでさらに留意しなければならないのは、それがリニアな定向進化論的な予定調和的「意味／目的」の系譜にではなく差異の差異が生む「生命という自己創出系」^[32]を継ぐ創発的進化論の系譜にその礎をおいている点である。さらにここには、本論 2.起点、でも触れたように、ポスト倫理が必要とされ、加えてそれらを現代的に深化統合する、本論 7.倫理、で触れられる複合社会／創発的進化を支える<審美／宇宙>概念に基づく、<info/aesthetics：情報／審美>へと展開される系譜の転回点がある。

21世紀を迎え、さらに多面的／揮発的／即発的な変容を遂げる情報社会は、静的かつリニアな我々の個体の意識や身体で構成されている「もの」ではなく、動的かつノンリニアな<観察者／記述者>のネットワークから生成される「こと」なのである。これらは現象学的社会学の視点からはシュッツの『生活世界の構造』において^[33]、唯名論的理論からはグッドマンの『世界制作の方法』によって^[34]、現象学的地理学の視点からはトゥアンの『空間の経験』によっても^[35]探求されてきたといえるが、基礎情報学が備えるシステムの階層構造と情報のグラデュエーションを<書き込みのシステム：観察者／記述者>概念において接合することで、これからの情報社会におけるこころの機序は塗り替えられるであろう。

情報社会においては、その下位システムにある我々はノードであり、その実体は情報のグラデュエー

ションの観察者／記述者としても機能する書き込みのシステムのネットワーク側の動態にあるのである。

このルーディメンタルでありながら、黙秘されつづけてきたパラダイムを、あらためて我々の意識に覚醒させ、さらに暗黙知としてリニアな人間の定向進化論をベースとしてきた人間科学は、ここでドラステックな転回を断行しなければならないであろう。情報社会に於いて誰もが皆、同様に欲する価値などないのである。換言すれば（あえて古式ゆかしい枕詞をつかわせていただければ）クリシェとして使い古されたにもかかわらず、アプリアリに信じられる<種の保存>という<生物の本能>を担保とする諸概念も見直さなければならないであろう。もちろん、そこには、疾病及び関連保健問題の国際統計分類である ICD11^[36]や精神疾患の診断・統計マニュアル DSM5^[37]も含まれ、すでに日本でも「精神医学の哲学」として多くの研究成果が生まれている。さらに本研究では、生物のみをその対象としてきた生命誌に、“人間＝機械”複合系をこえた<有機的機械ネットワークの創発的進化>が、新たなページとして加えられる前夜の準備となることを目差している。これらは決してリニアな機械論でも技術論でもなく、AI／シンギュラリティを迎えるにあたり、我々皆が留意・整備すべき学域・リテラシーであろう。

このように本研究では、<書き込みのシステム：観察者／記述者>概念を導入することにより、こころの機序を、<“人間＝機械”複合系の創発的進化>を内包・敷衍した、2.0へと刷新する。

5. 帯域^{2.0}：<生命情報／社会情報／機械情報：デュナミス／エンテレケイア>

心理学領野に限定すれば、こころの定義の変遷は、つまるところ、アリストテレスの「心とは何か」をめぐる膨大な注釈にすぎない、といったデフレ的なグランドフレームが本研究者には生成されており、本論もそれにより成り立っている。とくにマスコミに煽られることで活性化する民間のナイーブなフォーク・サイコロジー・マーケット／メンタルケアをめぐる生活世界の市場化とそのインフレは（外部から閉ざされているだけに）想像を絶するものがあり^[38]、さらに閉鎖的な教条主義は、市場自体を聖性とはなひとつ重なるところのない、DSMを担保とした独善的シャーマニズムとして蘇生しているともいえよう^[39]。近代の主体感製造過程の産物とはいえ、その市場への穏当なデフレ対策は喫緊の課題である。

こころは、環世界における身体行為のひとつのアスペクトなのである、というフラットな立ち位置を我々は身につけ、絶えず喚起する必要がある。それは可能態／デュナミスとしての身体行為の機能の現実性／エンテレケイアの一方で有り、身体行為／環世界のプロセス／インターフェイスなのである。そこにはデカルト的な心身二元論はない。あるのは、身体行為／環世界の情報のグラデュエーション／ネットワークである。換言すれば、現代において、それは多様な歴史・文化・社会の文脈のなかでの、いわば UI／UX の技術(実装)であり、さらに多元的／揮発的／即発的な変容を遂げる情報社会における戦略的な保護膜、ペーター・スローターダイクのいう「スフィア」として^[40]機能している、という程の醒めた視点が不可欠である。文化として揺れ動く科学(概念)だが真摯な視座でその機宜を掴めば、技術(実装)は社会を支える生命ともなる歴史を踏まえ、こころの定義を現代的に自然化し、涵養することが須要であろう。

しかし、ここで気をつけなければならないのは、それはすでに、マクルーハンの言う身体拡張と同様に、ネットワークに拡張されているという現況である。従ってそもそも脳に心があるとする心理学・精神医学でのケアはカテゴリーミステイクなのである。まず我々に必要なのは、心は脳にある、とするドグマからの解放であり、さらに、個々にこころが宿るとする、近代の主体感生成装置からの脱却である。

もちろん、櫻村愛子の「臨床社会学」、荳阪直行の「社会脳」も重なりはあるが残念ながらこれらでは扱いきれないドメインがある。なぜなら、こころは、すでに生命情報／社会情報はもちろん機械情報としてもあふれ出し響き合っており、だからこそ我々は多元的／揮発的／即発的な変容を遂げる情報社会での保護膜としてそれを頼りにできるのである（あるいは損傷すれば被害は甚大なのである）。いずれにせよ現況に即したケアのためには、アンディー・クラークやエコロジカル・マインドの系譜を踏まえながらも、情報と ICT と真に融和性のある、情報システム学／基礎情報学／メディア論からの思想と実践が不可欠であろう。このように本研究では、<生命情報／社会情報／機械情報>を<デュナミス／エンテレケイア>概念に接続することで、これからの情報社会の、こころの帯域を、2.0へと拡張する。

6. 遷移^{2.0} : The Gutenberg Galaxy から<The écriture cosmology>へ

<世界身体／書き込みのシステム>を市場から裏付ける現象として、フェラーリスのいう、スマートフォンのドキュメンタリー性を挙げる事が出来る。それは、いわば世界身体の自己言及性である。我々は、メディア論の系譜で、オングからマクルーハンに到るまで「声の復権」への願いを感受してきたが、残念ながら、電話であったスマートフォンを、我々は日々の書き込みシステムとして活用している。

また一方、高度な音声認識とビックデータと各社独自のアルゴリズムにささえられた、音声コマンドに特化したサービスも盛況である。しかしここで気をつけなければならないのは声が単純に復活したのではない点である。それはあくまで「書くこと」によるドキュメンタリー性に傾斜していったデバイスの「機械に対する」入力を「音声に切り替えたエクリチュール」なのである。つまり声による指示もエクリチュールとして変換され宇宙までも駆け巡るのである。もちろんそれを悲観的にとらえる必要は無いがマクルーハンの「グーテンベルグ・ギャラクシー」は（学際的な意義は色あせることはないが）現段階ではその願いは叶うことは無かった。それにかわり本研究では、マクルーハンへの敬意を込めて、声／書字の断層を超えデジタルドメインで融和する新たな鍵概念<エクリチュール・コスモロジー>を措定し、オング・マクルーハン・キットラー以降のメディアと意識の遷移を、本論 1.歴史、以降の現代史、「事例学」として研究／実践することで、これからの情報社会の、こころの遷移を、2.0へと架橋する。

7. 倫理^{2.0} : ethics から aesthetics, そして<info/aesthetics>へ

広告／マーケティング業界においては「もの、よりは、こと」をこえ、さらにユーザ・エクスペリエンスから、エンゲージメントのアフォードへとその力点が移行して久しい^[41]。それは、データ・ドリブンでリニアな中央集権的／普遍消費・競争命題から、エクスペリエンス・ドリブンでリゾームな分散的／独自世界・経験価値への移行である。科学(概念)神話が崩壊し「科学者も人であり科学も文化」と周知された現代では、こと消費財・娯楽文化においては、科学的に証明されたとされる客観的な事実=truthよりは、AR/VRも含め臨場性と没入感ある、それぞれの真実=actualityにこそ、訴求力を感じるのである。

もちろんビックデータによる模擬 AI への接近は目を見張るものがあり近未来への危機の声もある。しかし本研究はその発展に融和的である。一例を挙げれば映像音響作品の創作／制作／流通／享受プロセスに於いて「圧倒的なデータの解像度とそれを支えるバックボーン」進展の意義を職業人として体感してきておりキットラーの語るように技術(実装)がタイプⅢコンピュータ実現にむけ意識も組織も社会も創造的に変容する潜在性に溢れているからである。圧倒的な量は質を超えるのかもしれない。

ここでハイデガー／ヴィリリオに倣い技術の本質へと思考を進め^[42]、技術進展もひとつの生命態であり、有機機械となりえるネットワークであることを、さらに AI/シンギュラリティに対しても、脅威を感じるよりは、集合知の生命化とともに我々の潜在力を活性化できる機運と、肯定的に捉えていきたい。

これらを本論 2.理念と共に支えるのが道徳倫理にかわる<審美／宇宙>概念であり<info/aesthetics : 情報／審美>として措定し、これからの情報社会のこころの倫理を 2.0へと深化させる。

今後、1)諸研究学域を融和しながら本論 1.～7.詳細を順次発表、科研費獲得も期した学際的足場とする。2)ここから、建設的な熟議とネットワークが醸成され、3)情報システム学／基礎情報学が健やかな未来に実践的にさらに資すること、それが『こころ2.0を創発する』本研究／運動態のミッションである。

参考文献

- ^[1] 西垣通, “基礎情報学—生命から社会へ”, NTT 出版, 2004.
“続基礎情報学—「生命組織」のために”, NTT 出版, 2008.
- ^[2] 谷通, “意識の自然—現象学の可能性を拓く”, 勁草書房, 1998.
- ^[3] 正村俊之[編者], コミュニケーション理論の再構築—身体・メディア・情報空間”, 第2章, 大黒岳彦執筆, <身体メディア>の思想史, 勁草書房, 2012, pp.62.

- [4] Friedrich Kittler, “Aufschreibesysteme 1800/1900”, Fink Wilhelm GmbH + Co.Kg, 2003.
- [5] Hubert Dreyfus/Charles Taylor, Retrieving Realism, Harvard University Press, 2015.
Markus Gabriel, Warum es die Welt nicht gibt, Ullstein Verlag GmbH, 2013
Maurizio Ferraris, Manifesto del nuovo realismo, Rome: Laterza, pg., 2012
- [6] Daniel N. Stern, The Interpersonal World Of The Infant: A View from Psychoanalysis and Developmental Psychology, Basic Books, 1985.
- [7] Julian Jaynes, The Origin of Consciousness in the Breakdown of the Bicameral Mind, Univ of Toronto Pr, 1978.
- [8] ルイ・マラン著, 篠田浩一郎/山崎庸一郎 訳,
絵画の記号学—エクリチュール パンチュール, 岩波書店, 1986.
- [9] ベルナール・ステイグレル著, 浅井幸夫訳, 偶有からの哲学-技術と記憶と意識の話, 新評社, 2009.
- [10] 同^[7]
- [11] Lynne McTaggart, The Field: The Quest for the Secret Force of the Universe, Harpercollins, 2002.
- [12] 同^[5]
- [13] カンタン・メイヤサー著, 千葉雅也/大橋 完太郎/星野 太 訳,
有限性の後で: 偶然性の必然性についての試論, 人文書院, 2016.
- [14] 同^[5]
- [15] 西垣通/河島茂生/西川アサキ/大井奈美[編], 基礎情報学のヴァイアビリティ: ネオ・サイバネティクスによる開放系と閉鎖系の架橋, 第5章, 大黒岳彦執筆, 東京大学出版, 2014, pp.143.
- [16] 西垣通, ネットとリアルのあいだ, ちくまプリマー新書, 2009, pp.95.
- [17] 西垣通, 情報学的転回, 春秋社, 2005, pp.161.
- [18] 西垣通, “続基礎情報学—「生命組織」のために”, NTT 出版, 2008, pp.173.
- [19] C.G.ユング著, 林道義 訳, 元型論—無意識の構造, 紀伊國屋書店, 1982.
- [20] ガストン・バシュラール著, 岩村行雄 訳, 空間の詩学, 思潮社, 1969.
- [21] フェリックス・ガタリ著, 高岡幸一 訳, 機械状無意識—スキゾ分析, 法政大学出版局, 1990.
- [22] フェリックス・ガタリ著, 宮林寛/小沢秋広 訳, カオスモーズ, 河出書房新社, 2004.
- [23] 大黒岳彦, 情報社会の〈哲学〉: グーグル・ビッグデータ・人工知能, 勁草書房, 2016, pp.304.
- [24] フェリックス・ガタリ著, 杉村昌昭 訳, 三つのエコロジー, 平凡社, 2008, pp.87.
- [25] 同^[4]
- [26] 同^[4]
- [27] フリードリヒ・キットラー著, 石光泰夫/石光輝子 訳,
グラモフォン フィルム タイプライター, 筑摩書房, 1999, pp.453.
- [28] 同^[3]
- [29] 同^[22], pp.447.
- [30] アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリ著, 内藤濯 訳, 星の王子さま, 岩波少年文庫 1953.
- [31] http://www.weblio.jp/wkppja/content/星の王子さま_著作権
- [32] 中村桂子, 自己創出する生命, 哲学書房, 1993, pp.91.
- [33] アルフレッド シュッツ/トーマス ルックマン著, 那須壽 訳, 生活世界の構造, 筑摩書房, 2015.
- [34] ネルソン・グッドマン著, 菅野盾樹 訳, 世界制作の方法, 筑摩書房, 2008.
- [35] イーファー・トゥアン著, 山本浩 訳, 空間の経験—身体から都市へ, 筑摩書房, 1993.
- [36] <http://www.who.int/classifications/icd/revision/en/>
- [37] <https://www.psychiatry.org/psychiatrists/practice/dsm>
- [38] イーサン・ウォッターズ著, 阿部宏美 訳,
クレイジー・ライク・アメリカ: 心の病はいかに輸出されたか, 紀伊國屋書店, 2013.
- [39] ジョエル・パリス著, 村上雅昭 訳, 現代精神医学を迷路に追い込んだ過剰診断 -人生のあらゆる不幸に診断名をつける DSM の罪, 星和書店, 2017.
- [40] ペーター・スローターダイク著, 仲正昌樹 訳,
「人間園」の規則—ハイデッガーの『ヒューマニズム書簡』に対する返書, 御茶の水書房, 2000.
- [41] フィリップ・コトラー/ヘルマワシ・カルタジャヤ著, 恩藏直人 監修, 藤井清美 訳,
コトラーのマーケティング 4.0 スマートフォン時代の究極法則, 朝日新聞出版社, 2017.
- [42] 和田伸一郎著, 存在論的メディア論—ハイデッガーとヴィリリオ, 新曜社, 2004, pp.210.